まちぶせ　　岡本　悠

江夏は、フラレタ！

赤い薔薇を見ていた

あくる日も

あくる日も

ひとみ、との、恋も終わっていた

ふと、花屋のあの子、かわいいな

気になるようになった

花屋で、中年の女店員が叫んだ

「河野さん！　河野さんいる？」

へえ〜、名前は、河野さんなんだ

お土産を、持って帰った

河野さんは、今時の顔をしていた

あどけない顔

俺は、通りから、働いている河野さんを見つめた

あくる日も

あくる日も

そして、いよいよ作戦を決行した

スーパーに行く、行きに

河野さんを呼んで

赤い薔薇を１本、プレゼント用で買った

そのまま、スーパーに行った

帰り道、花屋に着いて

河野さんに、さっき買った薔薇を

プレゼントした

河野さんは「えっ、わたしに？」

と、不思議そうに、驚いた

俺は、「じゃあ、また来ます」

と言って、去った

父の日は、俺の誕生日だった

２回目の作戦

花屋に着いた

俺は、また薔薇を見ていた

河野さんがきた

「お探しですか？」

と言う

「どんな花がお勧めですか？」

河野さんは

「これと、これなんか」

「じゃあ、その３本をください」

「プレゼント用で」

中年の店員が、花を梱包した

少し時間がかかっていた

そして、受け取ると、

それを、すぐに、

河野さんに渡した

あっけにとられる河野さんだったが、

俺は、また、去っていった

俺は、図書館にいた

そこから、花屋を眺める

河野さんらしき、女性がいるような気がした

俺は、ジーッと、様子を見ていた

複数の人が働いていた

河野さんはいるのか？

似たような女性が、もう１人いる

俺は意を決した

近くのトイレの影に隠れて様子を見た

あれは、河野さんかな

たぶん、そうだ

俺は、手に手紙を持っていた

白い封筒に入れていた

バッと、飛び出して花屋に行った

が、河野さんがいない

俺は、「どうしました？」

と、言われたので慌てて

「河野さんは？」

と云った

「河野さんは、いませんよ」

と、女性店員が云った

俺は、とりあえず、店を出て

スーパーに行った

また、図書館に戻った

店員の数が減っている

あれは、河野さんじゃないか？

間違いない

今度こそ、渡そう

手紙を、渡して去ればいいだけだ

改めて、意を決した

河野さんは、使い古した、スニーカーを履いていた

行こうと思ったら、

先に、中年の女性の客が

河野さんを掴まえて、話をしていた

俺は、手紙を持ちながら待った

しかし、一向に話が終わらない

「お客さん、どうされました？」

男の店員から声がする

「いや、別に」

と交わす

しばらくして、その男の店員は、

「どうしました」

「ちょっと困るんですけど！」

と、声を荒げた

状況が変わってしまった

俺は、正直に「ちょっと、河野さんに用が」と答えた

その男の店員は「そういうの困るんですよ、わかるでしょ？」

と、言ってくる

河野さんも、事態に気づいているようだったが、その女性の客と話をしているフリを続けていた

その男の店員は、俺の、白い手紙の封筒を確認すると、改めて

「そういうの困るんですよ」と、繰り返した

一進一退の攻防

俺は、「警察を呼びたいなら、呼べばいいでしょ」と云った

男の店員は「そういうことじゃなくて、わかるでしょ？」

俺は、「わかってますよ」と云った

場所を替えて、待っていると

河野さんが、奥へ入りそうになった

男の店員は、「気にしないでいい」というような合図をした

俺は、ここで去られたら痛い、ヤバイと思った

でも、河野さんは、もう一度戻ってきた

今しか、チャンスはない

去られたおしまいだ

そう思い、

中年のお客さんに「ちょっとだけ、すみません」と言い

河野さんに、手紙をサッと差し出した

河野さんは、様子を確認すると

「ちょっと無理」と言うように、いなした

俺は、「わかりました」と言うと

「もう、２度と来ね　えよ！」

と、吐き捨てて、店を出た

後ろで、男の店員が「困るんだよ」と、まだ言っていた

その後も、この花屋の前は、何回も通る

最初の頃は、河野さんも、男の店員もいた

しだいに、河野さんを見なくなった

ただ、男の店員はいた

男の店員だけは、ずっといた

最近は、男の店員も見なくなった

たまたまかもしれない

俺は、その後、違う恋へと出発していた

それも叶わなかったけど

そして、新しい恋を探している

河野さんは、今、どうしているだろう

いつも、花屋を通りすぎる時、河野さんがいないか、まちぶせしている...

「完」